

9. 不動像付き『大相模道』道標石塔



寛保元(1741)

是よ里大さかみ道

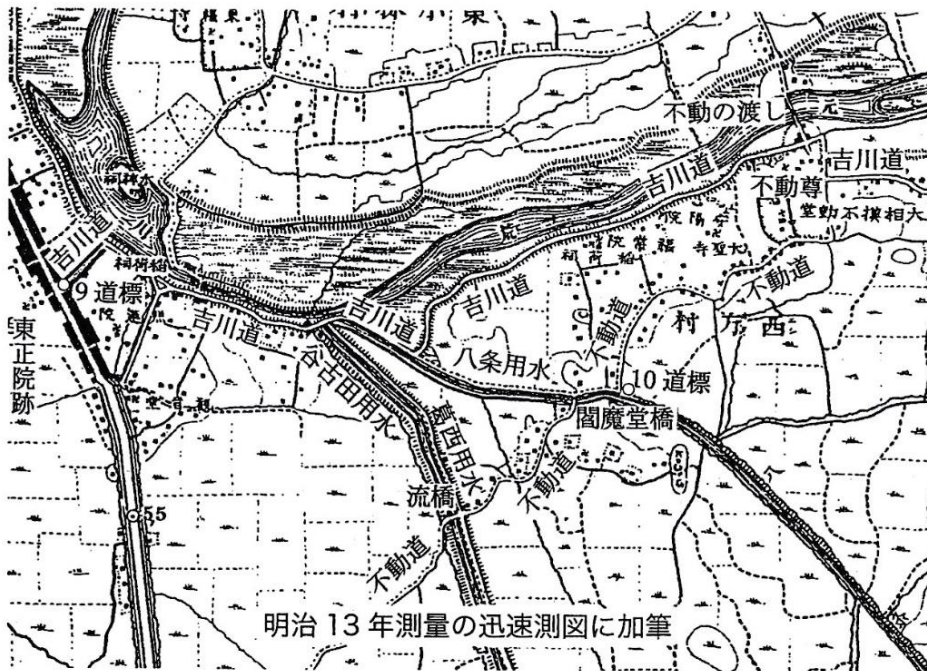
この不動道の道標は、越ヶ谷一丁目(越ヶ谷新町)の栃木銀行越谷支店の南東側の日光街道沿いにあるが、江戸の新乗物町講中の人々によって造立されたものである。新乗物町とは、現在の日本橋掘留町一丁目あたりであり、乗物(武家が乗る高級な駕籠)、つまり武家対象の駕籠屋が多かったことから名づけられた町名である。蒲生の茶屋通りの奉行地道入口にある不動道の道標も同じ講中によって造立されている。越ヶ谷新町の不動付き道標は茶屋通りのものと同じで、特に「是より大きがみ道」の字体が一致している。江戸時代の設置場所は、日光街道と吉川道が交わる角地にあった。現在は日光街道から瓦曾根溜井より移動している。

不動への道はこの角地から溜井に向かって北東に進み、突き当たって右に進む吉川道が不動道とも呼ばれた。大相模不動尊通り(吉川県道)は大正五年にできた新道である。

10. 不動明王像付き『不動尊道』道標

この「不動尊道」と書かれた道標は、八条用水に架かる馬頭橋のそばにある。前の9.で示された地図中の10.道標を参照願いたい。不動尊の参詣に流橋、閻魔堂橋を渡ってきた参拝客はここから左折して北に向かい、道なりに進むと、不動尊のそばの門前町を通過して不動尊の総門をくぐり、本堂に到着する。

道標をみると、草加宿へは八条用水の下流方面に、越ヶ谷宿方面には上流に



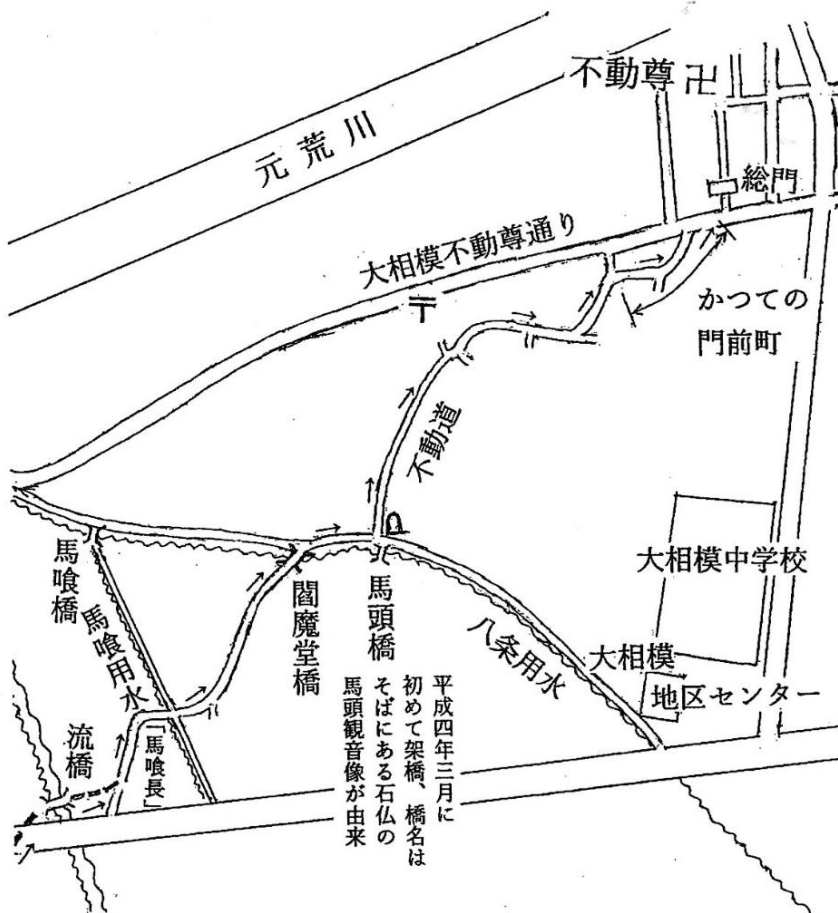
明治13年測量の迅速測図に加筆

進む。不動尊へは左折を示している。
 越谷市内の大相模の大聖寺の「不動尊」関係の道標は、
 道標の中でも最も多く見られる。参詣者が多方面からやっ
 てきたことを物語っている。



明和7 (1770)

是より 明和七庚寅
不動尊道
 左 十月吉日



不動尊の道標に関する詳細は平成二十四年三月発行の
 「川のあるまち第三十号」六十七頁をご参照願いたい。

安国寺の安政コレラの碑

加藤 幸一

一・江戸時代、全国に広まったコレラ

江戸時代末期の安政五（一八五八）年五月、中国（清朝）を經由して長崎に入った米国軍艦ミシシッピ号の乗員にコレラの罹患者がおり、それから二ヶ月後の七月には江戸に届き、全国にも広まった。この越谷でも蔓延したことが安国寺にある碑でわかる。

この病の名称は各地方で様々であったが、その後「コロリと死ぬ」の「コロリ（虎狼痢）」の呼び方が定着した。コレラの原因は妖怪変化や怨霊・たたりであると信じられていた。

二・越谷周辺でも蔓延したコレラ

長崎上陸後のコレラは、東進して江戸に達したが、大泊の安国寺にある「南無阿弥陀仏」の名号塔（『安政コレラの名号塔』）により、越谷周辺にも及んだことがわかり、江戸近在の当時の様子を知る貴重な石塔といえる。

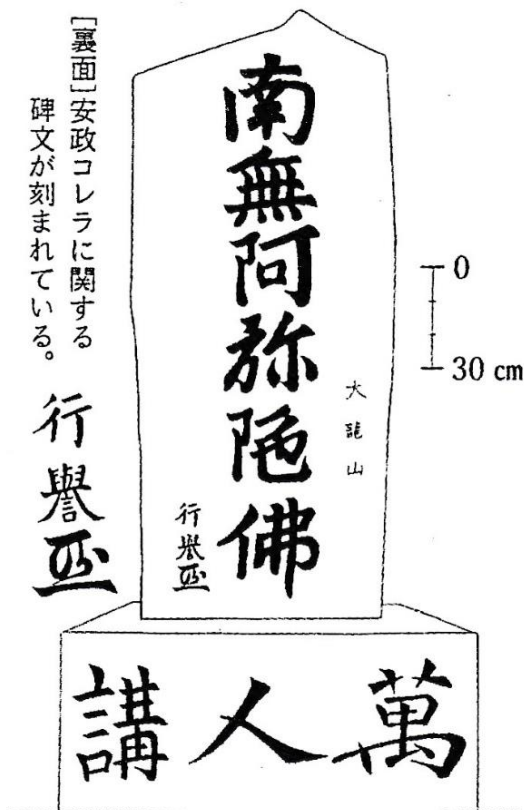
この石塔はコロリ（虎狼痢）に際して結成された万人講の記念碑で、安国寺にて昼夜参籠して亡くなつてしまつた

人々のことを思い浮かべながら、自身に報われる為にも百万遍念仏を唱え続けたとのことである。

三・安政コレラの名号塔の詳細

①名号塔の表面

この名号塔は北向きで、正面のスケッチは次の通りである。



安政コレラの名号塔

行誓宏善上人は大龍山安国寺の住職で、「行誓」の下に花押（署名）が見られる。台石は「萬人講」と刻まれている。裏面は宏善上人が認めたコレラの様子が刻まれている。

② 名号塔の裏側の碑文

裏側には文字がびっしりと刻まれているが、白っぽいウメノキゴケに覆われ、文字が刻まれていることさえ見落としてしまう程、解説には困難をとまなう。草書体の漢字と変体仮名で書かれた碑文は、次の通りである。

③ 碑文の解説文字（大谷達人氏から多大なご協力を得ました）

去年の七月はかり、いとあやしき疾出来、初て世中なへてやミ、のゝしり醫むかへんひまたにあらで、あはれにもはかなくうせにし人よいくそハくかかそへも尽ぬ、それが為にとて、八月廿七日より十月望の日まで、こゝろある限此精舎につとひ、種々の手向して、昼夜わかす弥陀佛の御名唱へて、懇ことふらひつる、此ひとくくハ、露もやミたるハあらざりき、せらるハ、おのか志しの為にとて、物せしにハあらねど、其功德の自にむくひきぬる故にやあらんと、いともたふとく覚えて、此度碑をつくり、尚もとてなん、かゝれハ、いよく、此世は萬の禍事をのかれ、さきくならへて、後の世は彼人々と、もに一つ蓮の臺にのり、常に月の御面をあふかん事、疑ふへくもあらずなん、其所由しるさまく、言葉の拙きをかへりみず、やかて筆をとる、

人の身は あさきねさしの 芝なれや
しものおくにも かれぬはかりそ
みつせ川 わたりわつらふ 人しあらハ
手火をしとりて しるへをハせん

〔解説文〕（解説は大谷達人氏、ルビは加藤）

昨年七月頃、とても異常な悪性で急逝する病気が発生。初めて事で世の中の総てが闇となる。大騒ぎしている内に医者を迎えるゆとりさえもなく、気の毒にも呆気なく亡くなる人がどれ程いたことか数えることも出来ない。その事が理由となつて安政五年八月二十七日より十月の満月（十五日）の日まで、心情がある者に限りこの寺院（安国寺）に集い、色々な供えをして昼夜の区別無く阿弥陀佛の御名を唱名して、心を込めて死者の霊に冥福を祈つた。精舎に集う人々には儂く失せにし人を想い、露（涙）も消えることはなかつた。人々にして貰う事は自身の心に向かう為であつて物の為では無いが、その御利益の自身にも報われる所縁があるからであらうと、南無阿弥陀佛と唱名することは本当に尊く思われて、この度石碑を造立した。更にして欲しいというので、それならば確かに現世ではあらゆる凶事（災い）から逃れ幸いに長生きしたので、来世では先に亡くなった人々と共に同じ蓮華の台に乗つて何時も月の御面を仰ぐことは疑う余地も無いことだ。その理由を感じずるも様々である。文言の表現の未熟さを省みず、取りも直

さず筆を執ることにした※。 ※行誉宏善上人をさす。

人の躰は短い根しか張らない芝のようなもの、霜が降りただけでも枯れてしまうくらいだ

三途の川を渡ろうにも旨く出来ず、苦しむ人があつたなら手燭をとって案内を為してあげよう

④台石に刻まれた多くの村名と人名

当時のコレラに対する碑を造立した多くの村々の人々の名前が台石の両側面と裏側面に刻まれている。

向かつて右側面には、岩付城内、大場、一ノ割、越ヶ谷宿、大川戸、本所（江戸か）、深作（見沼区）、船渡、三ノ宮、前谷（東松山市）、大枝、下内川（吉川市）、上間久里があげられ、人名は十八名程に及ぶ。

向かつて左側面には、上間久里、下間久里、大林、大里、船渡、平方、大枝、大畑、備後、大場、中野、一ノ割、大松、大杉、川崎、向畑、大吉、弥十郎、大房、恩間、大竹、大道、三ノ宮、末田、高曾根（岩槻区）、野嶋方（岩槻区）、山谷（川柳の上谷）、大沢町があげられ、人名は二十三名程に及ぶ。

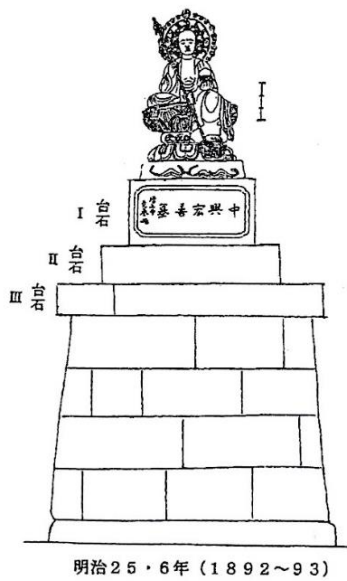
裏側面には、世話人として大泊村の十一名が刻まれ、発願主として大泊村の六名が刻まれている。名字だけを紹介すると、石川、森田、渡辺、高崎、長本、瀬尾、那倉、関根の名字が見られる。最後に造立した「安政六己未年正月廿五日」が刻まれている。江戸やその周辺をコレラが襲つ

た翌年のことである。

四、碑文を書いた宏善上人の墓塔

行誉宏善上人は、「安国寺の中興」と称され、近隣のみならず、遠方の村々の人々からも尊崇された人物である。そのことは宏善上人が亡くなされると、巨大な墓石がかなりの遠方を含む広範囲の村々や人々によって造立されていることからわかる。

安国寺中興・宏善上人の墓塔



明治25・6年(1892~93)



拡大図

宏善上人の墓石の上には、丸彫りの地藏尊が安置され、頭光には地藏の真言「オン・カ・カ・カ・カ・ビ・サンマ・エイ・ソワ・カ」の九字の梵字が刻まれている。図では「オン・カ・カ・カ」と「ソワ・カ」が見られる。背中に行誉宏善の名があり「明治廿五年 中興 乗蓮社行誉上人称阿入楽 善 一月十四日写」と刻まれている。

右肩後ろには「北豊島郡岩淵町 正光寺廿六世 願主 大谷栄純 安国寺エ 日課講中同郡同町 発起 佐野政右衛門」と刻まれている。台座には周囲に十一組の下方に反つて開いた反花がみられ、それぞれに多いもので十名を超える名前が刻まれており、その総数は百名を超す。裏側の反花の真下の台座には「鑄 藤原利定」と刻まれ、次に地藏尊造立に関する経費などの報告が刻まれている。最後に地藏尊を造立した年「維時明治廿五年十一月造立」が刻まれている。

正面の台石Ⅰには、大本山増上寺の僧侶竟誉きやうよによって大きな字で「中興宏善墓」と書かれており、その下の台石ⅡⅢに百六十九名の名前が刻まれている。

向かって右側面の台石ⅠⅡⅢには、百五十二名の名前が刻まれている。この墓を造立した安国寺の住職二十七世諦てい誉善成よげんせいの名前と造立された年月日「維時明治廿六年歲次さいじ 四月二十五日 立之たつ」もⅠに刻まれている。寺院としては「西岩寺」（現・野田市の中里村）、「大聖寺」（現・越谷市

内の大相模村）、「長福寺」（元、大泊の閻魔堂）、「慈眼寺」（大泊の觀音堂）の四寺院の名前が見られる。

裏側面の台石ⅡⅢには、百四十名の名前が刻まれている。「源法寺」（現・江戸川区東小松川）、「良学院」（鷺宮町）、「願成寺」（伊奈町小室）の三寺院と「中野田講中」も見られる。石工として東京本郷区駒込浅嘉町の石井幾治郎と同区上富士前町の石井力蔵の二名の名前が刻まれている。

向かって左側面の台石ⅠⅡⅢには、二百八名の名前が刻まれている。法養寺（現・江戸川区内の一之江村）、大雲寺（現・佐野市内）の二寺院も見られる。

僧侶や鑄、石工を除いて数えると、地藏尊の台座の反花に刻まれた百名以上と、台石に刻まれた六百六十九名の併せて総勢八百名近くの名が並び、寄与した寺院は十寺院に及んでいる。このように広範囲にわたり多くの人々に敬われた宏善上人の遺徳が偲ばれる。

※主な参考文献：関根達人著「石に刻まれた江戸時代」（吉川弘文館）、都市出版「東京人」（二〇二二年三月 437号 渡辺憲司著「感染症への畏怖とやさしいまなざし」）、小長谷正明著「世界史を変えたパンデミック」（幻冬舎）、日経BP「10の感染症からよむ世界史」（脇村孝平監修・造事務所編著）